

2015年度卒業生によるカリキュラム評価

—看護系大学生の卒業時の不安に焦点をあてて—

五十嵐 慎治 ¹⁾	大島 弓子 ¹⁾	古賀 節子 ¹⁾
榊原 千佐子 ¹⁾	大瀬 恵子 ¹⁾	蒔田 寛子 ¹⁾
三輪木 君子 ¹⁾	村松 十和 ¹⁾	永井 邦芳 ¹⁾
松本 尚子 ¹⁾	山口 直己 ¹⁾	山根 友絵 ¹⁾
野村 浩 ¹⁾	西澤 和義 ¹⁾	廣瀬 允美 ²⁾

抄録

本学看護学科2015年度卒業生（4期生）を対象とした自記式アンケートにより、カリキュラム運用上の課題と、学生の学ぶ姿勢に対する評価、どれくらいの学生がどのような不安を卒業時に抱えているのかを明らかにすることが目的であった。その結果、看護技術、看護の知識、看護実践力すべてにおいて、約9割の学生が不安を抱えており、それらの背景には、臨地実習での経験不足、卒業までの空き時間の長さが読み取れた。以上のことから、臨地実習での経験不足を補えるような指導の在り方、学生の体験を机上学習で得た知識と関連づけ、学生が臨地実習で観察・実施したことに意味づけができるような支援、実践につなげられるような思考プロセスを習得できる教育などが重要である。また卒業までに、看護実践力を強化するプログラムや最終チェックシステムの構築、卒業後のフォローアップシステムの構築が、教育と臨床をつなぐカリキュラムのためには必要であると考えられた。

キーワード (Key Words) :

カリキュラム評価 (curriculum evaluation), 看護系大学生 (nursing university students),
卒業時の不安 (anxiety at the time of the graduation)

I. はじめに

カリキュラムを運用するにあたり、ディプロマポリシーを意識した教育への取り組みは重要であり、カリキュラム評価では、教員はもとより学生からの視点は欠かせないものである。大島ら (2016) は、本学におけるこれまでのカリキュラム改正経緯を踏まえ、2015年度改正カリキュラムの検討過程とその成果について報告しており、その中で、多様な観点から具体的にカリキュラム評価を実施していくこと、カリキュラムの質向上のためにも評価を継続することの重要性を述べている。

今回、多様なカリキュラム評価の視点として、教育と臨床をつなぐカリキュラムといった

側面から考えてみたい。多様化、高度化している昨今の看護の臨床において、社会からの看護師への期待が高まる一方で、看護の質向上、医療安全の確保、早期離職防止への取り組みは喫緊の課題である。看護基礎教育の充実に関する検討会報告（厚生労働省，2007）の中でも、新卒者の中には、就職後、自信が持てないまま不安の中で業務を行っている者や、リアリティショックを受ける者、高度な医療を提供する現場についていけないため早期離職する者がいるとの報告がされている。村松ら（2016）は、早期離職防止に向けた対策を検討するため、本学看護学科の2014年度卒業生（3期生）を対象に、就職前にどのような不安を抱えているかを調査しており、7割の学生が知識不足や技術経験不足に強い不安を抱えていたことを明らかにしている。つまり、このような社会において、本学看護学科の卒業生も例に漏れない現状であることが推察された。

そこで、2015年度卒業生に対して自記式アンケートにより、2012年度カリキュラムの評価を実施すると共に、卒業時に抱える不安に着目した。実際にどれくらいの学生が不安を抱えているのか、どのような不安であるのかを分析することは、カリキュラム運用における課題や、教育と臨床をつなぐカリキュラムを検討する機会につながるという点で意義があると考えた。

Ⅱ. 目的

2012年度カリキュラムの運用上の課題と、学生の学ぶ姿勢に対する評価を明らかにし、どれくらいの学生が卒業時に不安を抱えているのか、それはどのような不安であるのかを明らかにする。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象：豊橋創造大学保健医療学部看護学科2015年度卒業生（4期生）94名

2. 調査時期：平成28年2月

3. 調査内容

質問紙は無記名自記式とし、質問内容はカリキュラム運用上の課題に対する評価、卒業するにあたっての不安、学生の学ぶ姿勢に対する評価の13項目から構成した。回答は4件法、あるいは2件法で求めた（表1）。

4. 調査方法

対象学生が学事にて全員大学内に集合した際に質問紙を配布し、その場で回収した。

表1 学生によるカリキュラム評価アンケート 質問項目の構成

【カリキュラム運用上の課題に対する評価】

1. 授業科目の配置について（空きすぎ、詰まりすぎ）
2. 実習ローテーションについて（空きすぎ、詰まりすぎ）
3. 休暇について（夏休み・冬休み・春休みの時期など）
4. 科目の順序性について（実習科目含む）
5. 選択科目について
 - 1) 基礎教育科目の選択科目
 - 2) 専門基礎科目の選択科目
6. 講義について改善して欲しいことはありましたか
7. 実習について改善して欲しいことがありましたか

【卒業するにあたっての不安】

8. 卒業するにあたっての不安はありますか
 - 1) 看護技術
 - 2) 看護の知識
 - 3) 看護実践力

【学生の学ぶ姿勢に対する評価】

9. 入学時からの4年間、意欲を持って主体的に学習に取り組みましたか
10. 大学で学んだ4年間で、自分が成長したと思うこと、変化したと思うことはありますか

※ 回答方法

- 1.～5. 「良かった」「ほぼ良かった」「やや改善の余地あり」「改善の余地あり」 4件法
- 6.～7. 「ある」「ない」 2件法
8. 「ある」「ややある」「あまりない」「ない」 4件法
9. 「取り組んだ」「やや取り組んだ」「あまり取り組めなかった」「取り組めなかった」 4件法
10. 「ある」「ややある」「あまりない」「ない」 4件法

5. 集計・分析方法

記述統計を用い度数を算出し分析した。4件法で回答を求めた項目に対しては、「ある」「ややある」をある群、「あまりない」「ない」をない群のように、同じ意向であると判断出来る2群にして集計した。また卒業時の不安に関する自由記述については、内容毎に1件とし、「看護技術」「看護の知識」「看護実践力」の3つの視点で分類した。

6. 倫理的配慮

本調査は、カリキュラム評価の一環として行うものであり、その目的を説明した上で協力を求めた。調査への参加は自由意思であり、提出をもって調査への参加とみなすこと、拒否できる権利があること、成績や指導態度等に影響することはないこと、無記名で匿名性が保たれること、公表する予定であること、について口頭で説明した。なお、アンケートの回答

欄に公表への同意の有無をチェックできるようにし、同意しないものは分析対象から除外した。

IV. 結果

アンケートは94名から回収された（回収率100%）。そのうち、アンケート結果の公表に同意が得られた86名（91.5%）を全て分析対象とした（有効回答率100%）。

1. 2015年度卒業生による2012年度カリキュラムの評価

1) カリキュラム運用上の課題に対する評価

「授業科目の配置について（空きすぎ、詰まりすぎ）」、「実習ローテーションについて（空きすぎ、詰まりすぎ）」、「休暇について（夏休み・冬休み・春休みの時期など）」、「科目の順序性について（実習科目含む）」、「基礎教育科目の選択科目（1・2年次）」、「専門基礎科目の選択科目（4年次）」、「講義について改善して欲しいことはありましたか」、「実習について改善して欲しいことがありましたか」の8項目の結果は以下の通りであった。

「授業科目の配置について（空きすぎ、詰まりすぎ）」は、「良かった」、「ほぼ良かった」が計48名（55.8%）であり、「やや改善の余地あり」、「改善の余地あり」は計38名（44.2%）であった。

「実習ローテーションについて（空きすぎ、詰まりすぎ）」は、「良かった」、「ほぼ良かった」が計55名（64.0%）であり、「やや改善の余地あり」、「改善の余地あり」は計31名（36.0%）であった。

「休暇について（夏休み・冬休み・春休みの時期など）」は、「良かった」、「ほぼ良かった」が計79名（91.9%）であり、「やや改善の余地あり」、「改善の余地あり」は計7名（8.1%）であった。

「科目の順序性について（実習科目含む）」は、「良かった」、「ほぼ良かった」が計66名（76.7%）であり、「やや改善の余地あり」、「改善の余地あり」は計20名（23.2%）であった。

「基礎教育科目の選択科目（1・2年次）」については、「良かった」、「ほぼ良かった」が計75名（87.2%）であり、「やや改善の余地あり」、「改善の余地あり」は計11名（12.8%）であった。

「専門基礎科目の選択科目（4年次）」については、「良かった」、「ほぼ良かった」が計78名（90.7%）であり、「やや改善の余地あり」、「改善の余地あり」は計8名（9.3%）であった。

「講義について改善して欲しいことはありましたか」では、「ない」が60名（69.8%）、「ある」が25名（29.1%）、1名（1.2%）は無回答であった。

「実習について改善して欲しいことがありましたか」では、「ない」が62名（72.1%）、「ある」が23名（26.7%）、1名（1.2%）は無回答であった。

2) 学生の学ぶ姿勢に対する評価

「入学時からの4年間、意欲を持って主体的に学習に取り組みましたか」という質問に対して、「取り組んだ」、「やや取り組んだ」が計62名(72.1%)であり、「あまり取り組めなかった」、「取り組めなかった」は計24名(27.9%)であった。

「大学で学んだ4年間で、自分が成長したと思うこと、変化したと思うことはありますか」という質問に対しては、「ある」、「ややある」が計76名(88.4%)であり、「あまりない」、「ない」は計10名(11.6%)であった。

2. 卒業するにあたっての不安

卒業するにあたっての不安は、「看護技術」、「看護の知識」、「看護実践力」の3つの視点から回答を求めた(図1)。なお、自由記述について内容毎にまとめたものを表2に示した。

まず看護技術に対する不安では、「ない」、「あまりない」が計11名(12.8%)であり、「ややある」、「ある」は計75名(87.2%)であった。自由記述では「実習で実践していないことも多いし、実習が終わってから時間も経っているので不安」、「1年時にほとんどの技術を行ったため、実習前や卒業後に不安がある」、「1年の早い時期に教えられてもわからない。注射などはせめて2年ぐらいがよかった。」、「男性患者の受け持ちが多かったので、女性患者への技術が不安」といった内容の不安が述べられていた。

次に看護の知識に対する不安では、「ない」、「あまりない」が計11名(12.8%)であり、「ややある」、「ある」は計75名(87.2%)であった。自由記述では、「臨床現場で活かせるかどうか自信がない」といった意見が述べられていた。

最後に看護実践力に対する不安では、「ない」、「あまりない」が計11名(12.8%)であり、「ややある」、「ある」は計75名(87.2%)であった。自由記述では「実習でもアセスメントが得意ではなかったことから実際にできるかどうか不安がある」という意見が述べられていた。

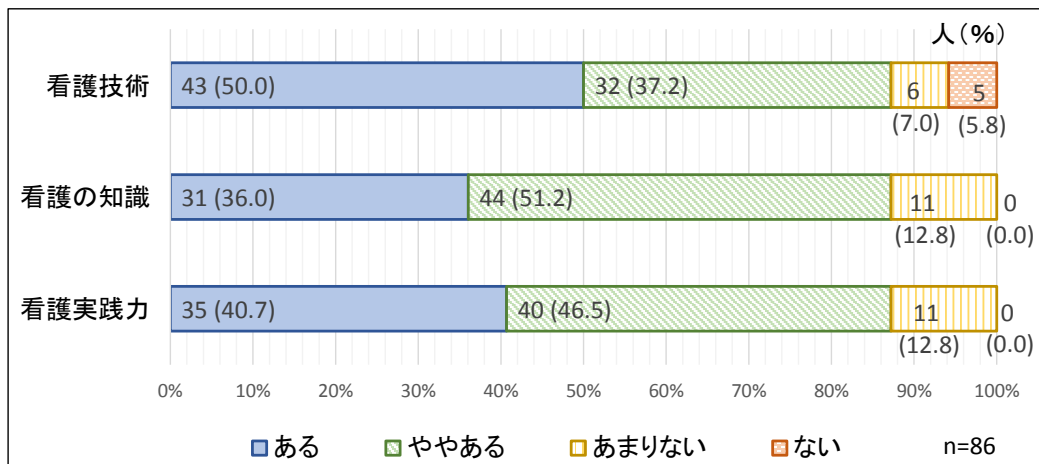


図1 卒業するにあたっての不安

表2 卒業するにあたっての不安 自由記述

項目	自由記述内容 () 件数
看護技術 計21名 22件	実習で実践していないことも多いし、実習が終わってから時間も経っているので不安 (7)
	1年時にほとんどの技術を行ったため、実習前や卒業後に不安がある (2)
	1年の早い時期に教えられてもわからない。注射などはせめて2年ぐらいがよかった (2)
	実習からも1年次の技術演習からも期間が空いているので自信がない
	現場で行う技術に触れることが初めてなので不安はある
	実習だけではやり切れない部分と忘れてしまった部分がある
	1年次に学んでから、実習などでやっていないものも多いと思う
	実際にやったことがないと不安
	まだまだ経験が必要
	男性患者の受け持ちが多かったので、女性患者への技術が不安
	もう少し学べる時間がほしい
看護の知識 計14名 15件	自主的に練習してもよいのか迷った
	やってない技術に不安が残っている
	4年次にあまり技術をやらなかったので不安
	国試の勉強はしていますが、それを現場で活かしていけるか自信がない (2)
	国試の勉強以外の授業の内容があまり頭に残っていないので少し不安
	国試の知識では通用しないので
	勉強不足 (2)
	専門的な知識があまりないため
	解剖から病態理解
	すべての実習において知識不足を痛感した
	国試の勉強をしていたら知識のなさを痛感した
看護実践力 計16名 17件	実習中とはとても勉強して覚えたが、今その知識が全て残っているわけではないから
	ゼロだったものが5になっただけ
	学ぶことに終わりはないと思うし、これからも勉強したいから
	知識がつながっていかない
	4年春学期に講座を開いてほしい
	実習でもアセスメントは得意ではなかったので、実際にやっていけるか不安がある (3)
	とにかくレポートをこなすことに必死で根拠まで丁寧に考えられなかった
	看護過程の講義から遅れ、実習で成長したと思うものの他の人より自信はない
	実習以外でやった回数が多いので、授業でやってもよかった
	実習で学んできたため大丈夫だと思う
	病院のやり方もあるのについていけるか不安
実習から時間がたっているのだから	
実習で短絡的なアセスメントを改善できた	
実習中にアセスメント能力を伸ばしたかった	
チームナーシング実習などを取り入れて欲しかった (統合実習)	
アセスメントはほとんどに苦手、文字にしてうまく表せない	
実習で身につけることができた	
様々な対象がいるため、柔軟に対応できるようになりたい	
問題の優先度を間違えたりしないかどうか	
アセスメントが苦手	

V. 考察

本調査から2015年度卒業生による2012年度カリキュラム評価結果と、対象学生が抱える卒業時の不安の一部が明らかになった。以下に、カリキュラム運用における課題や、学生の抱える不安から教育と臨床をつなぐカリキュラムについて考察する。

1. 2015年度卒業生による2012年度カリキュラムの評価

カリキュラム運用上の課題として、授業科目の配置、実習ローテーション、休暇、科目の順序性、基礎教育科目の選択科目、専門基礎科目の選択科目、講義についての改善点、実習についての改善点といった8項目を学生の視点で評価した。ほぼすべての項目で6割以上の「良かった」、「ほぼ良かった」という肯定的な評価が得られていた。一方で、授業科目の配置についてのみ「良かった」、「ほぼ良かった」という肯定的な評価が6割を切る結果となり、他の項目よりも肯定的意見の間かれる割合が低かった。このことは、科目によっては配置が

詰まりすぎており、それが結果に反映されたと考えられた。実際に2012年度カリキュラムでは、基礎看護学の授業は1年次で完結しており、その後のカリキュラム改正では、1・2年次に分けて配置している。どの時期にどの科目を配置するのが学習に効果的かをよく吟味し、科目配置のバランスを十分に検討しておく必要があったと考える。

4年間を振り返っての主体的な学習への取り組みについては約7割、自己の成長度については約9割の学生が肯定的な評価をしていることがわかった。肯定的評価割合の高さから、努力をしてきたという自信の現れと読み取ることができる。一方で、卒業にあたっての看護技術、看護の知識、看護実践力に対する不安の度合いは高いことから、あくまでも4年間といった長いスパンを通せば成長を認めるだろう、という学生の解釈が反映されたと考えられた。

2. 卒業するにあたっての不安

本調査から、看護技術、看護の知識、看護実践力すべてにおいて、約9割の学生が不安を抱えていることがわかった。本学看護学科の3期生を対象とした村松ら(2016)の調査でも7割以上の学生が知識不足や技術経験不足に強い不安を抱えていた。大塚ら(2013)の研究でも、就職を間近にした時期は、職場の人間関係、技術や知識への不安を抱いており、それが大学に要望する支援であるとの知見を述べている。調査時期や質問内容の違いから端的に比較はできないが、本調査対象が不安を抱えること自体は、特別なことではなく、むしろ現実と直面する中で、将来のことを見据えることができていると捉えることもできる。

看護技術への不安を見てみると、「実習で実践していないことも多いし、実習が終わってから時間も経っているので不安」、「1年時にほとんどの技術を行ったため、実習前や卒業後に不安がある」、「1年の早い時期に教えられてもわからない。注射などはせめて2年ぐらいがよかった。」という意見から、科目配置の順序性や、科目配置の時期を考慮する必要性があったのではないかと考えられた。このことは、先にも述べた授業科目の配置についての結果にも反映していたと考える。また、科目配置のみならず、臨地実習で技術を習得させる機会が少なかったことも要因の一つであると考えられる。そのため、臨地実習において技術経験を増やせるような指導環境の調整や、実習の学内日を有効に活用することが重要だと考える。さらに「男性患者の受け持ちが多かったので、女性患者への技術が不安」といった性差によっておこるケアへの不安も聞かれた。このことも臨地実習での未経験さが背景にあると考えられた。実習指導計画を立案する際に、学生の学習習得状況やレディネスを把握し、それを反映させることの重要性を示唆する意見であったと考える。しかし、臨地実習で学生個々が全てを経験することには限界がある。したがって、各学生の経験を共有できるようにカンファレンスを活用したり、学びの共有を工夫したりと、実習指導の在り方を精錬していく必要があると考える。

看護の知識への不安としては「臨床現場で活かせるかどうか自信がない」が挙げられていた。臨地実習を通して、学生の体験と机上学習で得た知識を関連づけ、学生が臨地実習で観察・実施したことに意味づけできるよう支援していくことが臨まれるが、そのような点にお

いて課題があったのではないかと考えられた。また看護における知識は、日々進歩しており、最新のエビデンスを理解して実践につなげていくことが求められる。つまり、卒業後も自ら学習し、知識を集積していく必要があり、そのための学習方法や主体的学習への動機を高められるような関わりが重要であると考えられる。その点において、7割の学生が主体的に取り組めたと自己評価しており、卒業後も主体的に学習に取り組む姿勢が望まれるであろう。

看護実践力への不安としては、「実習でもアセスメントが得意ではなかったことから実際にできるかどうか不安がある」が挙げられていた。臨地実習において、的確なアセスメントを基にケアを実践し、対象に成果をもたらすといった一連の成功体験を経験出来ると、それが自信につながっていくと考えられる。このような自信を育むために、対象が変わっても実践につなげられるような思考プロセスを習得出来るよう教育していく必要がある。また、実際に実習が修了してから卒業までの期間が8ヶ月あり、その期間が不安を増長させるとも考えられる。したがって、卒業を目前に控えた学生が、それまでに経験できなかった技術や、不足に感じる知識を補うためにも、看護実践力を強化するようなプログラムや最終チェックのシステムを設けることが重要だと考えられた。また、2015年10月から看護師の特定行為研修制度が開始されて以降、特に看護実践トレーニングセンターのようなサポート体制を充足させている病院が増えてきている。大学としても卒業生を対象としたフォローアップシステム等の対策を検討していくことは課題であろう。

このように様々な不安を抱える学生に対して、これらの不安を軽減もしくは払拭するために、その原因自体にアプローチする対策と、これらの不安自体を受け止められるような対策を講じる必要があると考えられた。

3. 本調査の限界と今後の課題

本調査の限界として、あくまでも学生の主観に基づくカリキュラム評価であり、客観性が担保されていない。調査票作成の段階において、例えば、「看護技術」「看護の知識」「看護実践力」などの用語の定義を明示しておらず、学生によって解釈に違いが生じた可能性も否めない。また、調査票を用いた横断調査であるため、対象の経時的変化は捉えきれていない。さらに、本学看護学科1学年の学生のみを対象とした、単年度のカリキュラム評価の結果報告であり、一般化するには至らない。

今後は、質問紙の内容や測定方法、調査方法などのさらなる検討が課題である。また卒業時に抱えていた不安が、就職後どのように変化していくかなど、継続的な評価も視野に入れる必要がある。

VI. おわりに

2012年度カリキュラムの評価を実施する中で、卒業を目前にした多くの学生が不安を抱えていることが明らかになった。その背景には、臨地実習での経験不足、卒業までの空き時間の長さが不安の要素としてあることが読み取れた。技術経験の不足、未経験な出来事を補う

ためにも臨地実習指導の在り方を精練させていくことや、学生の体験を机上学習で得た知識と関連づけ、学生が臨地実習で観察・実施したことに意味づけできるよう支援していくこと、実践につながられるような思考プロセスを習得出来るよう教育していくが重要であると考えられた。また臨地実習修了から卒業までの期間に、看護実践力を強化するようなプログラムや最終チェックシステムの構築、卒業後のフォローアップシステムの構築などが、教育と臨床をつなぐカリキュラムのために必要なことであると考えられた。

謝辞

本調査にご協力いただきました豊橋創造大学保健医療学部看護学科の学生の皆様に謹んで感謝申し上げます。なお、本調査は第26回日本看護学教育学会交流セッション「カリキュラム評価の現状と課題—学生，教員からの評価に焦点をあてて—」で発表した内容の一部に、追加修正して報告しています。

引用文献

- 菅野由美子，新井祐恵，伊藤朗子，他（2014）：看護系大学卒業生が卒業後6か月時点で認識する看護技術到達度と困難度：卒業時との比較を通して，千里金蘭大学紀要11，57-66.
- 川越博美，有森直子，射場典子，他（2001）：教員によるカリキュラム評価，聖路加看護大学紀要（27），87-97.
- 村松十和，五十嵐慎治，鈴木ひろ子，他（2016）：看護学生の就職先選択要因及び就職前に直面する不安，豊橋創造大学紀要（20），25-33.
- 雄西智恵美，石井美里，岩永秀子，他（2002）：東海大学健康科学部看護学科におけるカリキュラム評価システムの構築：卒業時の学生によるカリキュラム評価アンケートの作成，東海大学健康科学部紀要8，53-58.
- 大島弓子，五十嵐慎治，古賀節子，他（2016）：カリキュラム改正の検討過程とその成果，豊橋創造大学紀要（20），47-65.
- 大塚真代，古米照恵，藤野文代（2013）：看護大学生の進路選択に影響する情報と支援ニーズ：卒業を間近にした看護学部4年次生への調査，ヒューマンケア研究学会誌5（1），73-77.
- 厚生労働省（2007）：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書，
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, Accessed on Nov. 22, 2016.